

911.3
7

葛村遺稿

全



吳春寫
錢之真



江山一色は瀟灑主痕暗の
あり禪箱お手ひくは是
又此大方子周り七
年謝芝名村

盟家の本寺より由りて

蕪村遺稿

春之部

於日守り已仰り在り給ふ



うらみすよの村ぬ井を流す功を
習わ塔をとりの木乃中
と在る未流る習見とある
うらみすよの村ぬ井を流す功を
習わ塔をとりの木乃中
と在る未流る習見とある
うらみすよの村ぬ井を流す功を
習わ塔をとりの木乃中
と在る未流る習見とある

うらむすの啼わあら向山向
学わ世中乃島安の牛百廿
種木用之むす西之むそめ
うらむすおし宗任ら勅者す
うらむすわ柏作ををあらね
嘗や梅好みおる此の鹽四
うらむすわ並陸の里の
帝あるうらむすお山おし
つか宿のうらむすをさん世
世

泉しあらえ常守らあしむら
一おあそら好ら知い何梅の
塊と笑ら花梅乃あらしす
さしちを島さあて梅見す
水と散てつれあおらあ岸の梅
うらむすのむたあをいおわ梅の月
世路の梅おも赤らあらあす
風雪の吹ひおわ梅の風
白梅やつをれつれも休たす

子梅や入日の就むふ松りい
梅の香の立ちのちりえや月の暈
散るたむと光り梅の梢りふ
雪解や妹り巨魁こそ是依
池田らら炭くれしまのさきま
をらくとちぬやうさる梅り
やぬりの宿のね女乃ともり
やお入や梅こそめはく男山
粒又入をと守りれ子あのかきる

朧月大はをのちる市井り
おちち舟桂こにちる水やち
月おちち高柳の坊のお食時
不こおらし十三夜乃やあま
柳もやとらわいあ葉柳下恵
明前の姫り柳あけりけり
風吹りあおちのそまは柳り
やあまら日くれかろゆた外
あまの夜ふたりたあま暖るお

春の雨のふりのあふことたのしみ
釣鐘いとまふるをたむらひさるや
日くればそとわ昔のちもむか
まのむねや旅の誘ふ上童
等よまく香煙くまの夕や
まの夕々の強み強き花の
枯葉て昨日の雨をたふし
漸そく水や田螺の戸々叩く
そよぶや秋宿もえわたる

細く折れた門人の見え
細き目のまよひを花の山嶽
そよぶや花の山嶽のまよひ
細く折れた門人の見え
細き目のまよひを花の山嶽
そよぶや花の山嶽のまよひ
細く折れた門人の見え
細き目のまよひを花の山嶽

井や野うら掃ふ花あ柳

花と老女の足あはあ

は夕涼の足あはあ

難ゆやあはあ

うへ帝やは里はあ

阿の女乃宿とあ

油を力とあ

ぬた女も金の間とあ

心鬼はあ

イ女と老女とあ

山虫葉や白粉とあ

枕の花ちるや

雄の灯とあ

うらもあ

葉の元やあ

このあ

葉のあ

葉のあ

葉のあ

たのむ花やまを山名の麓にまゐ
花のたや摩耶とて水鏡の
いとしと葉を電よひのあか
飢ゑの花 踏しおかし 山梅
花よりわめ我住む京の
梅を未あとし月をけをむけ
人問とて常言わ山はぬら
法輔の花を徳中と鳥帽子
たえん丹波の鬼乃おれお

山名の冷飯をむ梅にお
下やしき 僧却のつ花七律
ま地わらんちとて山梅
花と啼をむはしとて 燕外
ましとて花咲めめ山梅
花とまて鞠をたらしとて 燕外
ましとて花咲人いおめ
花とまて花をたえとて 燕外
くらおまをむとて花のあし

馬より高根の梅見ゆ
祇也鑑也花と香柱ん
柏木乃ひらばあつた
又よこまわゆる花
梅らる苗代水や星
さぬ散て刺ある草
海より更と散か
むす規石山の梅
らる梅花る花のゆ

ちの梅花を後も
鳥帽子脱て糸と
永とらととてわ
まはるわ梅をゆる
ふれらぬ日や山
月とまをとて
石工乃梅やゆ
大原や御躰の中

うらみ深く皆より入り来るのこれ
大明の御もや、靡わ春のくれ
花はもたら、栲の師匠の春のくれ
河ら向さらぬた人ゆら、花の春
山老の南いりら春のくれ
春のこれ花は春の人とわかれ
とをさるる力を恨らぬわかれの
お佛とやらお仕舞い、花のくれ
かよくこよの思ふ春のくれ

中をよと眼をよとあめな
はまおおまよひをたにけぬる
ゆへ春の春の七つを、花の春
の春のいりら春のくれ
春をよむ人や花の春のくれ

花の春のくれ
花の春のくれ
花の春のくれ
花の春のくれ
花の春のくれ

夏文部

夏の夜にうきあそびの田を
ぬき七葎弓矢にけり松井
こころもくらしんや世も忘る
こころあそびの世をわすれ
ものごとく人まじりしは
ふの石あそびの思のちを
うらむく人七五尺のこころ
夏あそびの眉毛のつる

ふのえ塵うきけり朱の白
松をくちぎる世のあそび
はたあそびの世のあそび
大人あそびの世のあそび
虹を吐きしるえき牡丹
あそびの世のあそび
あそびの世のあそび
あそびの世のあそび
あそびの世のあそび
あそびの世のあそび

まゝ喰らえぬももも
金堀の山もきしんこ
親もあはれおのや田舎
月か捨しやる常らえに
鵜野を木の体すあわん
えんこ昨日もらと木常
おのも命とそめんこ
岡のる根もとも木は
みりおや金もぬきあ根は

的やまにおや縮妻の朝老
みりおの園をあせそ大井川
籠おのらわしめ夢の昔
みりおや吾妻あの人山崎
にらおやは常一のつる月一光
山崎の山の花のほや花は
金の問の人あはれ常葉
わとあ木の目と覚れたる
常中目あはれ片足や若根

海門山々の中のわが葉お
傳の茶をたし壯士餉にぬちお
心ゆく親王まを里のぬれお
葉茶梅や其石気とありわく
奈ら良の葉
岸根り帆いりなほさやうを
筍や柑と惜む 頃の外
あま秋や何となくあ根の船
あ刈てを山をせし家のお
あ刈と利き鋤もこのお針

あ秋やをぬいゆり堀の法
飯湯をぬれぬてうたあ秋
狐火やと助富乃ああ雨
あまさしああをわとひくお船
軒すしの便もをさうなぬお
おのふと船のに切るあしお
あ梅とあゆみ葉や貝乃
あし汐とこのあ細江のあな
あおれや美豆のあぬあ
わあ

おのりの尻お膝おせり家
曠野ゆくみかんとたらくわを流
その後と肘さる酒をききさ
仕にと白子、圍とすおせん
情家此君たさくれ白鳥の圍外
窓やたらう海倉武士のふ外
眼こぼれし悪君乃のふと始る
主志れぬのふと酒宴外
涼舟袖またち守列子外

葛のみや入記の湯おと諸ん
石床のふとふと葉あまの月
取ちのふとふとふと
賊舟ととをの舟船ちなる月
水鳥の山路わけち法水外
石工のお火塔ほにみ法外
一法をわ法おぬみやる
鳥すれと水またきじいぢの巴
わら葉と水法り花のぬけ
十

ひるふるやまのちろぬわ比ね
ひらし
うまひきる机の上のやわんが
いさくらをがき(のれん席)漢
腋あや隣回志のたやんが
しほあやうさる春うらやんが
雨よもゆる物釣る宿のやまが
おたのけと紙はおの内侍が
一日のよるがま(のら)やんが
たるとおのちうんえとま(る)佳刺が

兵と大將位とやんが
わらわの枝あやはつじんが
天とあらん比ね天の流やんが
唇白や母とあまが
夕白や武士とあし乃裏は
比あふや川焼くやんが
木葉の袋はるしは抜川

晴院と城と女が
あや

秋之部

温泉の底に我足見ゆる
夕の秋の精進のたしめ
中つるこもとあつめり秋
硝子の果ちをさるる秋
うちはと焼けしたる秋
菊川よ公にうら泊り秋
さるる秋孫換授乃舟の宿
課おふ王孫りたゆまお

徹書記のゆの宿や秋
地を金おちうたを中
錦木の門とたると秋
看病乃身こより秋
あまの確も秋のゆを秋
銀閣の浪をの人も秋
接待や昔提持陰乃は秋
接待へとよるる秋
片と入や納たの暖は秋

三好花中 秋人
朱妻 活 秋人
錄 金 五
福 唐 中 三 三 銀 澤
有 妻 中 秋 活 秋 人 丹
朱 妻 中 依 活 活 秋 人 丹
花 中 依 活 活 秋 人 丹
將 秋 中 袖 朱 妻 秋 人 丹
故 里 中 坐 臥 秋 人 丹

三好花中 秋人
朱妻 活 秋人
錄 金 五
福 唐 中 三 三 銀 澤
有 妻 中 秋 活 秋 人 丹
朱 妻 中 依 活 活 秋 人 丹
花 中 依 活 活 秋 人 丹
將 秋 中 袖 朱 妻 秋 人 丹
故 里 中 坐 臥 秋 人 丹

篠竹の葉の影をばさし
 旅人の火をおもはるる秋の影
 柳の葉おいらもそよぶ
 修理寮乃雨にれゆお權介
 修の者の徑にめはる 桔梗外
 とくして一把にありぬをけん
 黄良のや萩の袖のこゝろを寺
 うす花の萩の葉末のこゝろを
 岡のふらぬむら路の萩のこゝろ

萩はらぬ玉田横ぬかたれ
 秋たまりぬし萩はくをな里
 葉の葉又こゝろをれ白のや特た
 天狗ののらるる萩ははるお外
 花はかりのそよぶお外
 地下にこゝろぬやむの萩外
 追はこゝろぬらるるお外
 そのあめ尾のゆりはこゝろ
 蟀や相如ら弦の切る時

秋の蚊乃人ともなるさくら井
簞虫のさきを寺の扉の中
りしか帝袖を袖しり出お石
加茂川のかしかい知を都人
田こらちを田とさぬいり秋の改
秋のぬ我友の巻きたためし
秋のぬいりらや雀を放ちたる
はるいせと歌はらる僧と秋のい
秋風と散や幸都はまの艶膚

しらぬのやんをぬ秋の風
おとらと存住不しる寺の秋
唐来のらららや流し秋の風
おやお方お画を書く若人の画
お方をねるぬの舟まあそり
人とも灘がしにかお方の海
手流お方お女あしと女あ
おるある村い更をにふの月
盗人の首領哥をむらふの月

月の宴秋夜のおのころに
よむお草煮る坊のころお
三井寺やこの詩はくる諸
名月やあつめゆめい
ちちおや鯨末をぬし能
水の月やと印しはるお
赤の百子ぬふいぬ隣
貴人乃園のちちゆく
枕もと石とせきたをれ

をうや忍の里のさめ
お好みも廣野のこの
うけ稲とそ風のそたく
け稲のそら解た標の
稲とれお草と秋の日の
またおと稲もまゆは
ゆらと常稲拾とや耐
白ぬしおあの子お
稲とれお化とあを

西原庄と通る地はあたりに
妻も子も寺にもいふ所は
善心子、帆柱のふらふらの
足取のまゝ、田やをいかに
茶に水御のそとありは茶
古寺に唐土を林ちくちく
御ももる公おとぬや、番
うはくや、おとぬや、番
かし

花鳥の彩色のまを母衣に子
お屋守結よすむ母衣はには子
錦をもの也さよさくとかに子
笠とれて面目をももちま子
船頭の樽とれたる也子
鴻の巢の酒代とかる也子
也さとと氣のつる 濼子
曉の糸根と矢のたけのこも子
また二つ瓦ぬまの也さ子

南の穴ともせ滅る也さ子
西原と通る也かのおた子
妻も子とすてもの也さ子
美心子帆柱ぬまの也さ子
足の也さ田をり也子
花と水御ともちまりも也
古寺と唐糸と林ちもち子
湯もちる公の也さ子
うたくも也さ子
何もとからし

茶葉列之為中我中

根之為花也其理甚明

曼珠沙華之為花也

德東開也已在茶葉中

茶葉之為花也其理甚明

下也為茶葉也其理甚明

舊之味也其理甚明

茶葉之為花也其理甚明

松為消也其理甚明

將之月之華者也其理甚明

能能之也其理甚明

能能之也其理甚明

能能之也其理甚明

能能之也其理甚明

能能之也其理甚明

能能之也其理甚明

能能之也其理甚明

能能之也其理甚明

平の穴のゆゑ入るも似せむの
当り鹿や僧都の軒も細柱

らものこと三集あこ

おぬ句せじとていふこ

猪乃狸うぬらや、床のあ
床赤や、やうる暁の月
たらぶのひたをえをれ鹿の色
山かのらおやまの、おぬ、床の
窓の灯と山をいせえ、海のま

それいふを常者いなるん、取荷

秋のおの徳とゆふ越の免が

床能開地

住むたの秋のおをこく大勢が

秋のおおむ、書とむ、南、娘、所

お福え、おま、おま、おま、お

巫女と机をいふ、おま、お

書綴る、仰の鼻、あ、おま、お

た、油、お、お、お、お

をもちたれど独基をいれおそ
多僧の佛とてよまじおそ
りてとてよまじおそ
長徳こうはくたる菊の香
白き菊や庭と余りて白田
二切はと菊まぬるを佛
菊の香やあまする暗
ふの菊や五助の庭と
梅もよふおお遊しと

柳の香やあまする
味飲の價はむめ竹垣
子の月常子人ともお
後北月鴨たらし水の
三井孝の紙子の紙
萩の風とささりお男
草の花漢おむ宿の
春や老木の柳と玉
柳のおおの老とち

わい何と化るれいよ 秋のれ
割瀟の陸ととよかわ 秋のる
ふもあそふととあや 秋の暮
くまらあるふのしはわ 秋のれ
門ともて故人とあそひの 秋のれ
秋ともせとよはしあさ 秋のれ
るさしの西へさる葉 秋のる
戸とゆく狸と秋と惜みあ

人何能尔也物也
訓蒙在也物也
大者人也物也
名也物也物也
物也物也物也
物也物也物也
物也物也物也

物也物也物也
物也物也物也
物也物也物也
物也物也物也
物也物也物也
物也物也物也
物也物也物也

巻二部

義忠の御事と世にやまの御事
水戸の御事とあつたに
移されし城守の御事
目撃と昔の御事
釣人の御事
化をうまふ御事
跡をぬく御事
禪林の御事

たゞの御事
海棠の御事

歌集の御事

やのしはとねの御事
子と若ぬ御事
くまの御事
よの御事
運ぶ御事
半江の御事

茶袋巾と捨るよんそら七
根草の枯れおと踏わ
よまのとはかしく捨るは
麻印のよんそら捨るは
首世果とをそり葉印の
麦の魁魁もや夕日
おされて遊の美楽
枯尾をみやか
秋去といく日こ
おれおれ

三のよも農こか
畠もよも農こか
石こをそりこ
こらわ廣ゆこ
おほやみや何の
風やのそりこ
那の馬の遊を
松の枝を
秋宵のよんそら

初をねむるはたふも種をこく
まををたむる風の牙の舌をこし
を舟のふしを信り依りしんれん
分員念を儒者とて来るおんり
に切の降も飯のゆかり
に切や稍ゆるしは堀とまり
に切や北も足れた西をま
知ひしむる裏所を角子
思まら書に存し念かふ

番集しもの風のさるをみはり
とや萬國宗社とあはれはこ
孝りも子供学んてえんは
宿志の紙衣の肩や朱漆村
おやまをしとて求むるは
晴ろおと政中とあはれ
路ちの園祝子徐をふ政中
助もる医師をいふ政中
埋火およまをいふあはれ
比丘比丘尼

埋たぬも雪に消らぬやいふは
うほみかた我名とくをよとを
かた
少福山宿園と云ふおとく
ひのほ

悼文やぬ

白山の骨とひらくおの
縁をやおんてよかもえぬ
終におとあはれとぬる神
子とぬまをせぬるおちた
墨流のおの錦やをらたて

秋風りの秋をひらき
文札の明も秋のひらき
大雪とありはあまの戸さし
大雪やよあまのてい
雪背をととかんをれい
雪玉やお総たのほ
熊をひゆさり深雪か
雪のまら格とあえ
雪の日母あのをめえ

わたしゆお女のあやうぢや
あしをたておのちをたて
おしやちもちやち
おんちおちゆりし
里ぬこ江のなるおし
あふ流もちし井の里
府の儒者遊の美夫
な海にも滅ちる書生
達衣乃妻もちる

玉川のふかにあやむ
鯉乃友
鯉汁の甚ま元え上座
鯉のついで先生文と揮
海のたなを京をちる
鯉汁の君と我おし子
何暇けや玉座のおの
鯉けやちるおの
さあお思切おち
その昔は倉の海や

此の月のまゝかゝるゝ鮎おし
鮎とけ鼎とゆふを味おひ
山をらし川の鮎ののちんか
くまよせんとはちおす鮎井
已るし鮎おして月を
おころのちのちのちのち
福あつちあ集あつちあ
おちあ集あつちあ
おちあつちあ

柳深のちちの細きとをちあ
音の調ちちのちちをちあ
佐深ちちち男をちあ
おちあ母あつちあ
鮎鮎ちちちちをちあ
ちちちちちち乃ちち
ちちちちちちちちち
鮎鮎のちちちちち
ちちちちちちちちち

余の

とやふん元日又あまの

Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like '梅' and '山'.

雪ちる口は人東山よ倉しん甚村の

是し墨をる今書あり画あり肖像

あり多梅もあさ香ふ申よ夫し福と

疑する写本ありニア申のさす又

献りやのま紀とらふえ何多孫らん来さ

体をもさねと村の信らば疑ふつ而さ

良ふすまあや他中よま考し新よ

途一句を自中あん山書を成す高将

ふるまを古人の遺言よめしむる者あるは
道と名とのふのを後金福寺の塔を
叩け松丸三年辰巳の書画
是の書村のりのもある

明治庚子春

月刊



明治三十三年十月十一日印刷
明治三十三年十月十八日發行

編者 水落 為石

発行所 ち坂布衣店あせ町四丁目
百三十七番外 鹿田 静七

不許複製

発行所

ち坂布衣店あせ町四丁目
百三十七番外
鹿田 静七

